

ベンガル社会の形成

—中世初期におけるその萌芽—

古井龍介

1 はじめに

歴史的構想力を、私はコンテクストを考慮した上での歴史変化の理解と、後世における遡及的な過去の認識・意味づけへの感受性にあるものとする。これを前近代ベンガル史に当てはめれば、諸社会集団の形成をそのコンテクストの中で理解し、それが後の時代に再定義される過程を捉えるということになる。

近代ベンガルのヒンドゥー社会を特徴づけるのはブラーフマナとサット／アサット・シュードラで構成される独特のジャーティ秩序と、特定のブラーフマナおよびカーヤスタの家系に特権的地位を付与するクリニズムである。後世の伝統は前者をヴァルナ間混交による雑種身分の誕生に、後者をアーディシュウラ王による5名のブラーフマナおよび随伴するカーヤスタの北インド中心部マディヤデーシャからの招聘、バッラーラセーナ王による5ブラーフマナの子孫に対する村落の施与とクリーナ身分の認定に帰するが、それらを裏付ける碑文その他の同時代史料はなく、その歴史的信憑性は低い。しかし、中世初期¹の碑文および文献史料からは9-13世紀の社会変化における両社会制度の萌芽が読み取られ、また、新たな社会秩序の形成に伴う諸集団間の緊張と交渉も認められる。本稿ではその概略を述べた上で、近世・近代の伝承形成によりそれらがベンガル社会の特徴として定着する過程を展望する。

2 ブラーフマナのアイデンティティ・ネットワーク・権威形成の過程²

ベンガルにおいて最初にブラーフマナが明確に言及されるのは、5世紀半ばから6世紀半ばにグプタ朝統治下の北ベンガルで発行された銅板の土地売買文書である。これらには、在地有力者の合議を通して地方

行政の重要事項を決定したアディカラナと呼ばれる組織に対して、特定の個人やその集合が申請した土地購入と宗教的施与が記録されている。ここに記された手順において、ブラーフマナはクトゥンビンやその上層であるマハッタラなど農村土地保有者層の一部として、文書の告知先に含まれ、また土地売買可否の決定に参画している。彼らのアイデンティティーが明確に示されるのは土地被与者である際に限られ、その場合もブラーフマナであることが記されるのみで、ゴートラやヴェーダ学派等のアイデンティティー指標への言及はほとんどなかった。

6世紀半ばから7世紀前半には南ベンガル、ついで西ベンガルに独立の王権が成立し、それらの支配下でアディカラナとそれに関わる有力者らによる土地売買文書の発行と売買手続きへの関与が続いた。そこではマハッタラなど在地有力者層の台頭が顕著であったが、ブラーフマナの中にもその一角として成長し、施与村落(アグラハーラ)の保有者として村落を代表する者が現れた。また、被与者であるブラーフマナについても、ゴートラとプラヴァラ、ヴェーダ学派などの指標によりアイデンティティーが明確化される傾向が見られた。一方、7世紀の東ベンガル辺境では、森林開発による農業拡大という歴史的文脈の中、従属支配者層の主導により多数のブラーフマナが土地施与を受けて定着した。アイデンティティー明確化の傾向も一部で見られたが、辺境への定住農耕社会拡大の媒介者として、ブラーフマナであることそのものが強調された。

9世紀から11世紀にかけて、北・西ベンガルと南・東ベンガルのそれぞれでパーラ朝とチャンドラ朝の王権が確立すると、比較的強い支配の下、銅板文書発行による土地・村落施与は王権の特権となった。ブラーフマナはこれらの文書の告知先に、農村住民の一部として、かつ他の住民とは区別して言及されている。しかし、より顕著なのは、被与者である高位のブラーフマナの存在である。彼らは、土地・村落施与によりあらゆる収入源・資源への包括的な権利、警察・司法権および耕作者を動員する権利を王権より与えられかつ保障される、特権的な階層として農村に存在した³。アイデンティティー明確化の傾向は、このような高位のブラーフマナに強く認められる。

被与者であるブラーフマナは、親族関係に関わるゴートラ、プラヴァラと3代ないし4代にわたる系譜、学識に関わるヴェーダ学派および修得した知識分野、そして儀礼専門家としての地位を示す称号など様々な

アイデンティティー指標とともに言及されている。これらは彼らの強いアイデンティティー意識を示すものである。学識は彼らを他の農村居住ブラーフマナと区別する。始祖・先祖を示すゴートラとブラヴァラはシュラウターストラ編纂時にすでに体系化されていたが、以前の銅板文書に言及されることの少なかったそれらが系譜とともに必ず言及されるようになったことは、より敏感な親族意識、さらにはそれを必要としたブラーフマナ家系間の頻繁な婚姻関係の形成を示唆する。加えて儀礼、特に除災儀礼シャーンティへの従事は、その奉仕を受ける王権との関わりを意味する。

パーラ朝の銅板文書ではさらに、被与者ないし彼の家系の出身村落および居住村落が記されている。これらは彼らの移住の道程を示すとともに、被与村落を加えた少なくとも3村落を繋ぐネットワークが移住によって形成された過程を類推させる。移住によるネットワーク形成が必ずしも施与による王権の介入を必要としなかったことは、11世紀のシリムプル石碑から知られる。7代のブラーフマナの頌徳碑であるこの碑文は、諸村落の「誕生」の連続、つまり「系譜」として彼らの移住と新村落形成の過程を述べた上で、在地有力者との婚姻関係、寺院の建立や池の掘削などの慈善事業による村落への定着と威信の形成を記録している。そこでは、王権との関係の希薄さが顕著であり、わずかにカマールーパ王ジャヤパーラによる招聘の拒否と、諸王による表敬訪問についての曖昧な表現とが記述されるにすぎない [Basak 1915-16]。

この碑文や銅板文書の起源・居住村落記述からは、マディヤデーシャの地名を冠した集落の形成が明らかとなる。現在の西ベンガル州ヒリ・バルルガト地域に当たる北ベンガルのシュラーヴァスティには、タルカーリ、ハスティパダグラマ、クローダーンチャ／コーランチャなど、このような集落が集中していた。これらは、マディヤデーシャからのブラーフマナの移住と定着を示している。西ベンガルのシッダラグラマも、著名なニバンダ（ダルマシャーストラの梗概）作者であるバヴァデーヴァなど、マディヤデーシャ出身のサーヴァルナ・ゴートラのブラーフマナの居住村落として知られる。これらのいわば拠点村落は、ブラーフマナの移住によって形成されたネットワークの結節点となった。

12世紀にはパーラ朝支配の衰退に伴い、カリंगा出身でチャンドラ朝後の南ベンガルを支配したヴァルマン朝と、カルナータカ出身で西から

南、ついで北ベンガルへと支配を広げてパーラ朝を放逐し、短期間、ベンガル全域をほぼ統一したセーナ朝が台頭した。末期のパーラ朝を含めたこれらの王権はブラフマニカルな伝統に強く傾倒した。高位のブラーフマナはマハーダーナやシャーンティなど特定儀礼の専門家として、あるいはニバンダの編纂などに当たるダルマの権威として王権に奉仕したが、彼らの存在は王権によるダルマシャーストラおよびプラーナに基づく規範の受容と、それを護持するブラーフマナの王権とのより強い結び付きおよび宮廷での権威確立を意味した。

ブラーフマナによるネットワーク形成は初期の移住の継続とその後の移住・拠点形成の鈍化を経て、拡大よりも各地での定着が重要となる段階に至った。銅板文書からの被与者の出身・居住村落への言及の消失はこの変化を示すものである。それはまた、前時代に見られた拠点村落を結節点とするネットワークの形成と相俟って、北のヴァレンドラ、西のラーダというベンガルの下位地域に基づくアイデンティティーの形成に結実した。

高位ブラーフマナの農村への定着は、文書告知先として在地住民に付された「ブラーフマナを伴う」(*brāhmaṇ-ottara*)の語の意味が、直前に「ブラーフマナ」を加えることで「上位のブラーフマナ」に転化したことに表れている。農村社会における彼らの権威の増大は、セーナ朝後期の文書の告知先に記された在地住民がブラーフマナと高位ブラーフマナに限られることに示されている。権威の確立は進行中の過程であり、彼らによる地方的プラーナの編纂には、自己の権威を維持しつつ在地の伝統を取り込む意図が読み取られる。

ベンガルで編纂されたプラーナに顕著なのは、ドウルゴートサヴァなどの名で知られる秋の女神の大祭である。この祭礼は、身分・階層など参加者の差異の一時的抑止と性的逸脱を含む秩序の転倒により、農村社会の団結・一体性を再確認する共同体祭式としての性格を有していた。5・6世紀ベンガルの農村社会はクトウンビンと呼ばれる土地保有農民層を主要構成員とし、彼らの共同性と他社会集団へのドミナンスを基礎としていた。その後の在地有力者層の台頭と非農耕民を中心とする新たな社会集団の農業労働者としての編入は、農民層および農村住民の差異化と階層化をもたらした。このような傾向に対して農村社会の均質性を主張し、その一体性を保持しようとする動きは11世紀のサンスクリット

農書クリシパラ・シャラにすでに認められるが [Furui 2005: 164-169]、プラーナの女神祭礼はその流れを汲むものと捉えられる。プラーフマナは祭司および施与・食事などの供給の受け手として自己を挿入することで、この民衆的祭礼を取り込み、制御し、農村社会における権威を高めようとした。同様の試みはディーパーンヴィターおよびラーソートサヴァといった祭礼についてもなされた。一方、プラーフマナの関与が全く認められないシヴァマホートサヴァの例は、彼らの試みが必ずしも成功しなかったことを示している。

3 同業者集団の形成—ジャーティへ—

プラーフマナによるネットワーク形成と同時期に、職能集団のアイデンティティー明確化と組織化も進行していた。商工業者による同業者集団の形成は北ベンガルの主要都市では5世紀にすでに始まっていたが、9世紀以降は書記などの職能集団がプラーフマナと類似した形でネットワーク形成と組織化を進めていた。それらのうち顕著なのは、パーラ朝銅板文書の銘刻に従事した2系統の書記達である。一方は東ベンガルの下位地域であるサマタタの出身で、「良きサマタタ出身者の子息」ないし「良きサマタタ出身者」というアイデンティティーを維持しつつ、パーラ朝支配域の北ベンガルからビハール東部で活躍した [Furui 2008: 71]。もう一方はラーダのポーシャリー・グラマ出身の書記達で、親類と考えられる3家系が銅板文書銘刻に従事していた [Furui 2011: 237-238]。

11世紀のラジビタ石碑からはさらに、農業拡大に伴い農村に活躍の場を移した商人達による新たな組織化が認められる。同碑文は3つの農村市場 (*hatṭa*) に属するすべての商人による組合 (*samasta-varṇig-grāma*) の取り決めを記録したものであり、そこでは構成員のうち、ソナカーデーヴィーマーダヴァと呼ばれる神格の寄進地内の園地を借りてキンマおよび椰子の木を栽培している者たちについて、各々の木1本ごとに一定額の金銭を同神格に納入することが定められている [Furui 2013b]。この事例は、一定地域内で所属する市場を横断して構成員が共同する同業者集団が形成されていたことを示している。

他の同業者集団についての情報は断片的であるが、後述のプラーナにおける社会集団の列挙からは、同様の組織化の進行が推測される。農村

に定着したブラーフマナの介入により、これらの集団はジャーティとして再定義・体系化されていくこととなる。

4 社会秩序体系化への試みとそれに伴う交渉⁴

権威を宮廷で確立し、農村に拡大していたブラーフマナは、同業者集団の形成と農業拡大に伴う非農耕民を中心とする新たな社会集団の包含という社会的現実を自己の枠組で認識・説明し、社会秩序を体系化することを試みた。ブリハッダルマブラーナ所収のヴァルナサンカラ(ヴァルナ間混交)の説話はその現れの一つであり、ヴェーナ・プリトゥの伝説とヴァルナサンカラ理論の双方が上記課題の解決のため動員されている。

説話はまずヴェーナの悪行、特に彼が強制したヴァルナ間混交とその結果生まれた「36の生業とその他」と呼ばれるサンカラジャーティについて述べ、シュードラと定義されて最高 (*uttama*) / 中位 (*madhyama*) / 最低 (*antyaja/adhama*) にそれぞれ分類されるサンカラジャーティ、シャーカドヴィーパから連れてこられたデーヴァラとその子孫、そしてヴェーナの身体から生まれたムレーッチャとその子孫を列挙する。その上でリシ達によるヴェーナの殺害と、彼の身体からの正しい王プリトゥとその妻の創造を語る。続く説話では、大地が作物を産しないことの原因がサンカラジャーティの闊歩にあることをブラーフマナから知らされたプリトゥによる、さらなる混交の停止と彼らの生業を確定するダルマの集会の開催が述べられる。そこでは招集されたサンカラジャーティの抵抗、刑罰による彼らの服属を経て、ブラーフマナの尋問による彼らの生業の確定が描写され、また彼らの位階に応じて、彼らに儀礼的奉仕を行うブラーフマナの地位が説明される。

以上の説話からはまず、ブラーフマナによる社会的現実の理解および自己の権威維持を条件とした諸集団の地位の再定義の試みが読み取られる。ヴァルナ間混交は様々な社会集団の存在を4ヴァルナの枠組で説明する理論であり、紀元前千年紀のダルマストラ以来、繰り返し用いられてきた。ヴェーナの身体からの誕生は、森林住民であるニシャーダの起源として、マハーバーラタや初期のブラーナに言及されている。こ

これらのモチーフの動員は、様々な同業者集団が形成されるとともに森林住民を含む外部者の包含が進む社会的現実を、ブラフマニカルな枠組で説明することを可能にした。また、自身以外をシュードラとするブラーフマナ／シュードラの2ヴァルナ構成は、西インドと異なりクシャトリヤ、ヴァイシヤの地位を主張する対抗エリート層の力が弱い状況で、自己の卓越を主張したものと捉えられる。サンカラジャーティの3区分は、父母の組み合わせによる浄性の階梯として社会階層を定義したものであるが、ブラフマニカルな価値観に基づく儀礼的地位であり、各々に対して儀礼的奉仕を行うブラーフマナとの関係により表象されている。

説話からは一方で、ブラーフマナによる自己の権威と支配への主張、他集団との交渉と、その過程における両者のデリケートなバランスも読み取られる。まず、サンカラジャーティの抵抗と服属は、彼らの自己認識に対して王とブラーフマナが反対の認識を強制する形を取る。ここには他集団の服属をテキスト上に表象する意図が認められる。それに続くダルマの集会において生業を定められるのは、最高ジャーティのうちの18と中位ジャーティのうちのスヴァルナカーラとスヴァルナヴァニク、そしてデーヴァラの子とされるガナカに限られるが、これらはいずれも知識・富・権威などにより農村社会で一定の存在を示す集団であり、ブラーフマナが影響を及ぼそうとした、あるいはその協力を必要とした社会集団と解釈される。特に重視されているのはカラナ、アンバシュタ、ガナカなどの識字層である。ブラーフマナは彼らにサンカラジャーティの最上位者としての地位や独自知識保有の認知などで譲歩する一方、知識獲得などにおける自身への依存・負債を強調し、またブラーフマナなど自身の保有する知識への侵害を警告するなど、強い警戒を示している。また、スヴァルナカーラとスヴァルナヴァニクには一段低い儀礼的地位と、金工・金商人を意味する彼らの名にそぐわない生業が与えられているが、そこには富裕層である彼らを警戒し、その地位と経済活動を規制・抑圧する意図が認められる。

5 結論

以上のような中世初期の高位ブラーフマナのネットワーク形成と権威の確立・拡大、そして同業者集団の形成は、冒頭に述べたベンガル・ヒンドゥー社会の特徴の萌芽と解釈されうる。それらによって形作られ

た社会的現実に対応するブリハッダルマプラーナの社会秩序体系化の試みは、その後のジャーティ秩序形成の礎となったが、その進展には続く時代にこの枠組が広く社会に強制・受容される過程が伴ったと考えられる。それは同時に、上記の社会的変化をコンテクストとして、過去とそれに連なる現在を再定義する試みであったと言える。

中世後期にはさらなる再定義と解釈の転換が見られた。高位ブラーフマナのマディヤデーシャからの移住はアーディシューラ王による招聘の結果となり、また彼らが形成した拠点村落の一部はバツラーラセーナ王による施与村落とされ、クリン・ブラーフマナの姓を構成するガインに含まれるようになった。このように、中世初期の社会変化は王の事績へと転換された。また、ジャーティ秩序についても、職人ジャーティの起源を呪いによってシュードラとして生まれた工芸神ヴィシュヴァカルマンとアプサラス・グリターチーの結合に求めるブラフマヴァイヴァルタプラーナのような別解釈は放棄され、ブリハッダルマプラーナによるものが主流となった。このような再定義は中世後期の社会変化をコンテクストとしていたが、それはさらなる社会変化とそれに対する新たな再定義へとつながっていった。

以上、中世初期の社会変化とそれが認識・再定義される過程を議論した。この過程の理解は、ベンガルにおけるその後の社会変化の深い理解に資するものとする。

註

- 1 南アジア前近代史において、7世紀から12世紀を中心とするいわゆる中世初期は、地方的政治権力とその階梯の成立、それらを正統化する地域カルトの出現、および周縁への農業と国家社会の拡大などを通して南アジア内各地域が形成される時代として活発な議論の対象となってきた。この時代を捉える基本的枠組については [Chattopadhyaya 1994: 1-37] を参照。
- 2 当節の詳細な内容については [Furui 2013c] を参照。
- 3 たとえばマヒーパーラ1世のラングブル銅板文書では、2村落が、それ自体の境界・草地・放牧地に至るまで、平地、造成地、マンゴーとマファの木々、水場、堀と塩地、市場と船着場への課税権、十罪の罰金徴収権と盗賊追捕権を伴って、すべての労働課役の免除、傭兵の不入、免税、すべての貢納の付与などの条件で与えられており、また住民に対しては被与者の命令に従い、彼に適時の貢納を行うことが要請されている [Furui 2011: 241, ll. 38-40, 46-

48]。

4 当節の詳細な内容については [Furui 2013: forthcoming a]を参照。

参考文献

- Basak, R. G., 1915-16 [1982], “Silimpur Stone-slab Inscription of the Time of Jayapala-deva”, *Epigraphia Indica*, 13, pp. 283-295.
- Chattopadhyaya, B. D., 1994, *The Making of Early Medieval India*, New Delhi: Oxford University Press.
- Furui, Ryosuke, 2005, “The Rural World of an Agricultural Text: A Study on the *Kṛṣiparāśara*”, *Studies in History*, New Series, 21-2, pp. 149-171.
- Furui, Ryosuke, 2008, “A New Copper Plate Inscription of Gopala II”, *South Asian Studies*, 24, pp.67-75.
- Furui, Ryosuke, 2011, “Rangpur Copper Plate Inscription of Mahipāla I, Year 5”, *Journal of Ancient Indian History*, 27, 2010-11, pp. 232-245.
- Furui, Ryosuke, 2013a, “Finding Tensions in the Social Order: a Reading of the *Varṇasaṃkara* Section of the *Bṛhadharmapurāṇa*”, in Suchandra Ghosh et al. (eds.), *Revisiting Early India: Essays in Honour of D. C. Sircar*. Kolkata: R. N. Bhattacharya, 203-218.
- Furui, Ryosuke, 2013b, “Merchant Groups in Early Medieval Bengal: With Special Reference to the Rajbhita Stone Inscription of the Time of Mahipāla I, Year 33”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 76-3, pp.391-412.
- Furui, Ryosuke, 2013c, “*Brāhmaṇas* in Early Medieval Bengal: Construction of their Identity, Networks and Authority”, *Indian Historical Review*, 40-2, pp.223-248.

ふるい りょうすけ ●東京大学東洋文化研究所准教授